

# 常盤仲之町遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告

二〇〇八―二一

常盤仲之町遺跡

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 常盤仲之町遺跡

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、道路拡幅工事に伴う常盤仲之町遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

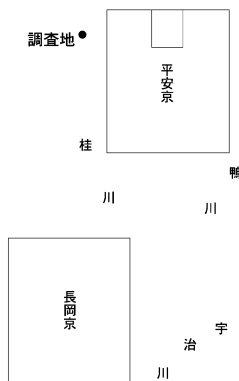
平成 21 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦東蜂岡町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2009年1月20日～2009年3月19日
- 5 調査面積 335 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 前田義明
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 前田義明
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	8
(1) 基本層序	8
(2) 第1面の遺構	8
(3) 第2面の遺構	12
4. 遺 物	13
(1) 遺物の概要	13
(2) 土器類	13
(3) 瓦類	14
5. ま と め	20

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第2面全景（南から）
		2	1区瓦溜5・集石6（南西から）
図版2	遺構	1	2区第2面全景（北から）
		2	2区南壁（北から）
図版3	遺物	瓦類	

# 挿 図 目 次

図1	調査前全景	1
図2	作業風景	1
図3	調査区配置図（1：500）	2
図4	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図5	南壁断面図（1：40）	9
図6	第1面遺構平面図（1：150）	10
図7	第2面遺構平面図（1：150）	11
図8	土坑30実測図（1：50）	12
図9	瓦溜5・集石6平面図（1：50）	12
図10	瓦溜5出土土器実測図（1：4）	13
図11	土坑30出土土器実測図（1：4）	14
図12	第2層・第3層出土土器実測図（1：4）	14
図13	軒丸瓦、軒平瓦拓影・実測図（1：4）	15
図14	平瓦拓影・実測図（1：4）	16
図15	平瓦拓影・実測図（1：4）	17
図16	丸瓦、平瓦拓影・実測図（1：4）	18

# 表 目 次

表1	周辺の主要な調査一覧表	5
表2	遺構概要表	8
表3	遺物概要表	13
表4	掲載土器一覧表	21
表5	掲載瓦一覧表	22

# 常盤仲之町遺跡

## 1. 調査経過

本調査は、市道梅津太秦線（城北街道）限度額立体交差事業に伴う発掘調査である。調査は京都市建設局事業推進室から委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という。）の指導の下、当研究所が実施した。調査地は東映太秦映画村の北東部に位置し、西側に隣接した映画村の建物建設に伴う1996年の発掘調査では、飛鳥時代の竪穴住居跡が4棟検出されている。また、2006年と2008年に実施した調査地北側を東西に横断するJR山陰線の高架工事に伴う発掘調査でも、飛鳥時代の竪穴住居跡や中世の池跡が検出されている。

調査対象地は道路拡幅予定地内で、JR山陰線から南方にあたり、約335㎡の調査面積で実施した。東側の城北街道沿いは歩道を確保するためにセットバックした。調査区は北側を1区、南側を2区とし反転して行った。1区の機械掘削による残土は場外に搬出し、調査終了後埋め戻した。調査地は駐車場として利用されていたが、1区の地下1.5mに旧建物のコンクリート基礎と貯水槽が壊されずに残されており、駐車場のアスファルトを含めコンクリートガラはすべて産業廃棄物として処分した。

北部の1区では、中央部から西側は旧建物の基礎や電線の埋設により、広範囲に攪乱されていた。城北街道沿いや調査区北部の稻荷の祠があった箇所の下は遺物包含層が遺存していたが、コンクリート基礎による攪乱は包含層よりも深く及んでいた。調査地の南側の2区も中央部から西半が攪乱を受けていたが、東半部は良好に遺構や遺物が遺存していた。

攪乱を受けていない部分ではアスファルト、碎石、近現代盛土層を除去すると、中世の包含層が認められ、この層を除去して第1面、その下にある平安時代の包含層を除去して基盤層の上面を第2面として調査を行った。

調査の進展に伴い市文化財保護課の指導が2月4日と3月3日に、検証委員の指導については、2月16日に鈴木教授（京都産業大学）、2月17日に高教授（立命館大学）により行われた。



図1 調査前全景



図2 作業風景

## 2. 位置と環境

調査地は京都盆地北西部に位置する。北側には音戸山の丘陵が迫り、また、北東側は御室川を挟んで双ヶ岡が穏やかな山容を見せる。現在は縦横に道路が交錯し、住宅・商業施設などが建ち並んでいるが、地形的には丘陵裾の緩やかに南へ傾斜する斜面に調査地は立地している。

調査地は、『京都市遺跡地図』<sup>1)</sup>によると、常盤仲之町遺跡として周知されている。常盤仲之町遺跡は古墳時代後期から江戸時代にわたる遺跡で、古墳時代から飛鳥時代の遺構は竪穴住居・掘立柱建物、平安時代の遺構は掘立柱建物・溝、鎌倉時代から江戸時代の遺構は土壇墓が検出されている(図4)。

調査地周辺には、数多くの遺跡が分布していることが知られている。以下で、主要な遺跡を紹介する。

調査地南西側には、弥勒菩薩像で知られる飛鳥時代に創建された広隆寺がある。旧境内は現在よりもかなり広がったと推定されており、下層からは古墳時代から飛鳥時代の竪穴住居・土坑などが検出されている。また、出土遺物には円筒埴輪がある。

調査地南東側の一ノ井遺跡は、立会調査で平安時代の溝・土坑・柱穴などが検出されている。

調査地南東側の和泉式部町遺跡は、弥生時代中期から古墳時代後期の集落跡で、竪穴住居が多数検出されている。また、出土遺物には韓式土器がある。



図3 調査区配置図 (1 : 500)

調査地東側の森ヶ東瓦窯跡は、立会調査でロストル式平窯が検出された。平安時代中期の修理職所属の造瓦所と推定されている。

調査地北側の村ノ内町遺跡は、弥生時代後期を中心とする集落跡で、立会調査で溝・土坑などが検出されている。

調査地北側の常盤東ノ町古墳群は、古墳時代後期の横穴式石室を備える円墳で構成される古墳群である。

調査地北東側の双ヶ岡には、一ノ丘から三ノ丘にかけて古墳時代後期から飛鳥時代の双ヶ岡古墳群がある。一ノ丘頂部にある一ノ丘古墳は、墳丘の直径が約 44 m、高さが約 8 m で、大規模な横穴式石室を備える。また、双ヶ岡周辺には、平安時代後期から室町時代に仁和寺の院家が次々と造営された。

調査地北西側の草木町遺跡は、平安時代から鎌倉時代の集落跡で、掘立柱建物と推定できる柱穴が多数検出されている。

調査地北西側の太秦馬塚町遺跡は、立会調査で平安時代後期の土坑が多数検出されている。出土品から墓壙の可能性が高く、周辺は墓域であったと推定されている。

調査地西側の上ノ段町遺跡は、古墳時代後期の集落跡で、竪穴住居・掘立柱建物・土坑・柱穴などが多数検出されている。また、平安時代中期の木棺墓も発見された。

そのほか調査地周辺には、千首塚古墳・和泉式部塚古墳・常盤御池古墳・常盤稻荷塚古墳・常盤柏ノ木古墳群・常盤馬塚古墳・巽古墳・太秦馬塚古墳・垂箕山古墳（仲野親王墓古墳）などの古墳が分布している。垂箕山古墳は全長約 75 m ある京都盆地では大型の前方後円墳で、嵯峨野の首長墓の一つに数えられている<sup>2)</sup>。これ以外は墳丘が失われるなどして詳細の不明な古墳が多いが、古墳時代後期から飛鳥時代の横穴式石室を備えた中・小規模の円墳・前方後円墳である。

こうした遺跡の動向から調査地周辺の歴史的な推移は次のように考えることができる。まず、少なくとも弥生時代後期には村ノ内遺跡・和泉式部町遺跡に集落が形成され、人々が定住するようになった。古墳時代後期になると常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡にも集落が出現し、検出遺構・出土遺物が増加する。同時に双ヶ岡の丘陵や集落の周囲には古墳が造営される。垂箕山古墳のように嵯峨野の首長墓系列に含まれる古墳があるが、その他は群集墳あるいは散在する中・小規模の古墳である。ただし、後世に墳丘が削平され現地表に痕跡を残していない古墳も多いと想定できるので、古墳の群構造については今後の調査の進展に期するところが大きい。飛鳥時代には広隆寺が造営されるが、常盤仲之町遺跡にみられるようにそれ以前から継続する集落もある。

平安京の造営は調査地周辺にも影響を与えたようである。常盤仲之町遺跡・草木町遺跡に集落が営まれる一方で、中期以降になると上ノ段町遺跡には木棺墓、太秦馬塚町遺跡には土壘墓が作られる。また、双ヶ岡東麓には清原夏野、南西麓には源常の別業が所在したという記録がある。さらに平安時代後期になると双ヶ岡周辺には仁和寺の院家が次々と建ち並ぶようになる。墓域・別業・院家は都城隣接地に特徴的な遺跡として評価することができるだろう。鎌倉時代以降も場所を移動しながらも集落は継続しており、近代でも特に戦後になって面的な開発が行われるよう

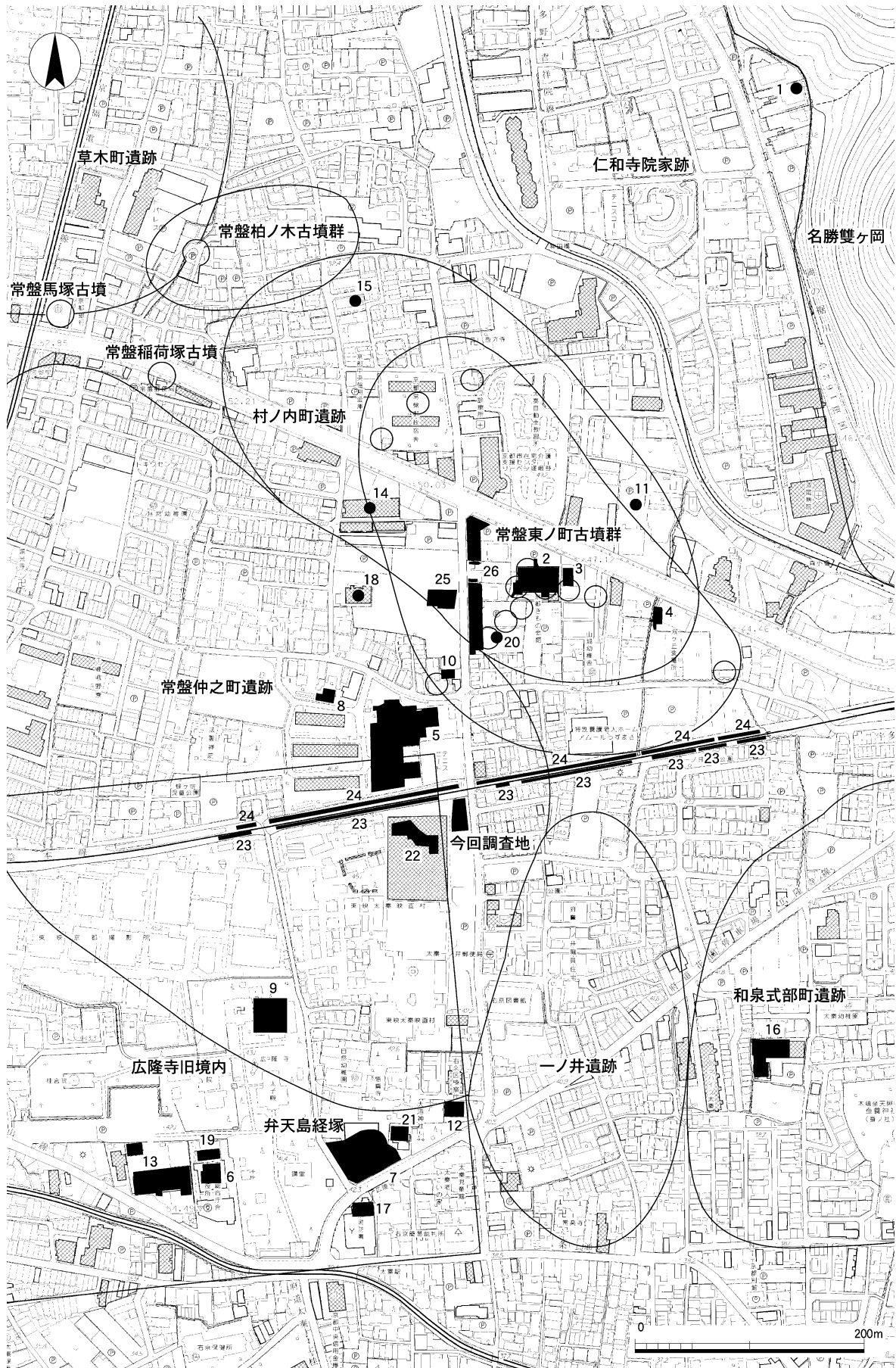


図4 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺の主要な調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	「平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	『仁和寺子院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦・須恵器・土師器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	「日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査」『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡-右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要-』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘鑄造遺構	「広隆寺跡」『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	「和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	「広隆寺旧境内1」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	「広隆寺旧境内2」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	『常盤東ノ町古墳群』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	「広隆寺旧境内」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の竪穴住居、古墳～飛鳥の竪穴住居、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生の竪穴住居、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
26	2008	発掘	2008.11.10～ 2009.03.17	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年

※ No.は図4の調査地点の数字と対応

になるまで、調査地周辺は京都郊外の農耕地帯であった。

調査地周辺では、これまでに多数の発掘調査・立会調査が行われている。以下に主要な調査の概要を記す（図4）。

昭和52年の発掘調査（5）では、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝、鎌倉時代以降の土壇墓などを検出した。出土遺物には、古墳時代後期から飛鳥時代の土師器・須恵器、平安時代後期から鎌倉時代の土師器・瓦器などがある。

昭和52年の発掘調査（6）では、奈良時代の土坑・基壇地業、平安時代の掘立柱建物、室町時代の土坑などを検出した。出土遺物には、古墳時代後期の円筒埴輪、飛鳥時代の土師器・須恵器・瓦類、奈良時代の土師器などがある。

昭和52年の発掘調査（7）は、広隆寺旧境内弁天池と中島で実施した。調査では中島上で16基の経塚を検出した。出土遺物には、中島の盛土から出土した平安時代の土師器・緑釉陶器・瓦類があり、経塚に伴う礫石経、青銅製経筒・蓋、鏡、青白磁、白磁、輸入銭貨、金箔軀仏、銅製椀、柄香炉、銅鈴、飾金具、ガラス玉、水晶玉、瑠璃玉、土玉、木玉、鋏、刀子、螺髪、硯、翡翠製分銅などがある。

昭和55年の発掘調査（9）では、飛鳥時代の竪穴住居、鎌倉時代から室町時代の柱穴・土坑を検出した。出土遺物には、古墳時代から飛鳥時代の円筒埴輪・土師器杯・須恵器・瓦類、平安時代の土師器・須恵器・瓦類、鎌倉時代から室町時代の土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類がある。

昭和55年の発掘調査（12）では、飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物・柵・土坑などを検出した。出土遺物には、飛鳥時代の土師器・須恵器、平安時代中期の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦類がある。

昭和56年の発掘調査（13）では、飛鳥時代の土坑、平安時代の土坑・溝・石敷き土坑・梵鐘鑄造遺構を検出した。出土遺物には、飛鳥時代の瓦類、平安時代前期から後期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁・製塩土器・瓦類・石製品・梵鐘鑄型・溶融炉・鞆羽口・銅滓などがある。

平成3年の発掘調査（17）では、飛鳥時代の溝・土坑・柱穴・竈、平安時代から鎌倉時代の土坑・遺物包含層を検出した。出土遺物には、飛鳥時代の土師器・須恵器・瓦類、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器・瓦類・金銅製仏像・銭貨・鑄型・窯壁・融着瓦・壁土などがある。飛鳥時代の竈は竪穴住居に付属したもののだが削平を受けて竈のみが遺存したものとみられる。

平成3年発掘調査（19）では、平安時代前期の溝、平安時代中期の土坑・柱穴を検出した。平安時代前期の溝は2条が東西方向に併行して延びた溝で、垣塀施設の内外溝の可能性はある。出土遺物には、平安時代前期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦類がある。

平成5年の発掘調査（21）では、飛鳥時代の竪穴住居・土坑、平安時代中期の溝・柱穴、室町時代・桃山時代の溝を検出した。出土遺物には、飛鳥時代の土師器・須恵器、平安時代中期の土師器・須恵器・白磁・瓦類などがある。



平成 8 年の発掘調査 (22) では、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代から江戸時代の遺構を検出した。

平成 18 年の発掘調査 (23) では、弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代の溝などを検出した。出土遺物には、弥生時代中期 (Ⅱ様式) の壺・甕、古墳時代後期 (6 世紀代) の須恵器・土師器・石棺の可能性のある加工痕のある石材、飛鳥時代の須恵器・滑石製紡錘車・土錘、平安時代前期の須恵器・灰釉陶器などがある。

平成 20 年の発掘調査 (24) では、弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居・炉・土坑・溝・掘立柱建物、奈良時代から平安時代の掘立柱建物・溝、鎌倉時代の池・土坑などを検出した。出土遺物には、縄文時代の凹基無茎石鏃、弥生時代中期 (Ⅳ様式) の無頸壺・壺・高杯、古墳時代後期の須恵器、飛鳥時代の土師器・須恵器・ガラス製品、奈良時代から平安時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の土師器・滑石製釜などがある。

平成 20 年の発掘調査 (26) は、府道宇多野・吉祥院線の拡幅工事に伴い実施した。調査では古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居・古墳石室、平安時代から室町時代の土坑・井戸などを検出した。出土遺物には、弥生時代・古墳時代・飛鳥時代の土器、平安時代から室町時代の土器・瓦などがある。

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第 8 版】』京都市文化市民局 2007 年
- 2) 『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会 1970 年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序

調査区の基本層序は、上からアスファルト、碎石、近現代盛土層、褐色細砂混礫層 40 cm (第1層)、黒褐色極細砂層 40 cm (第2層)、暗褐色細砂混礫層 30 cm (第3層)、地山基盤層のにぶい黄褐色細砂層の順である。2区の西半部では1～3層がなく、黒褐色細砂層が基盤層(地山)直上に堆積している。この層はいわゆる黒ボク層と呼ばれ、中世段階に落込(池か)内に堆積したものと考えられる。第1層と第2層は東側への傾斜をもって堆積している。また、第1層は山土のブロックが認められ、遺物の出土は少なく整地層と考えられる。第2層は1区の南東部と2区の東半に認められ、炭化物と焼土が多量に混入している。

第1層から中世(鎌倉時代)、第2層からは平安時代後期、第3層からは平安時代中期の遺物が出土している。

#### (2) 第1面の遺構(図6)

第1層を除去した面の遺構で、溝・落込・土坑がある。

落込1 中央部で検出した遺構で、東肩部を検出したものの大部分を攪乱によって削平されているため、範囲は不明である。埋土の黒褐色細砂(黒ボク層)は落込47と類似し、この遺構と接続する可能性もある。上層ではこぶし大の石が集中している箇所もみられた。

溝3 中央部で東西方向に検出した。幅0.6～1.0 m、深さ0.6 mを測る。遺物の出土は少ないため時期を確定しがたいが、落込1より新しい遺構である。

落込47 2区の中央部から西へ向かって落ちる肩部を検出した。埋土は均一な黒褐色細砂層(黒ボク層)である。黒ボク層は周辺の調査例で広隆寺旧境内や山陰線の調査でも検出されている。肩部は南北方向に直線的にのび、北側や西側が攪乱され規模は不明である。肩部に護岸施設はみられないが、素掘りの池の可能性もある。深さ0.6 mを測る。

落込29 調査区の東壁に沿って南北に長い落込である。中央部は攪乱があり、明確でないが、調査区の北東部と南東部で検出した。東側は調査区外へ広がり、幅は不明。中央部が攪乱されているものの、幅1.5 m、長さは25 mに及ぶ。調査区の東側が城北街道であるため、道路の側溝となる可能性もある。

土坑30(図8) 2区の落込47の肩部で検出した。南北3.5 m、東西1.5 mで楕円形を呈し、

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	瓦溜、集石遺構、ピット、掘立柱建物	第2面
鎌倉時代～室町時代	落込み、土坑、溝	第1面

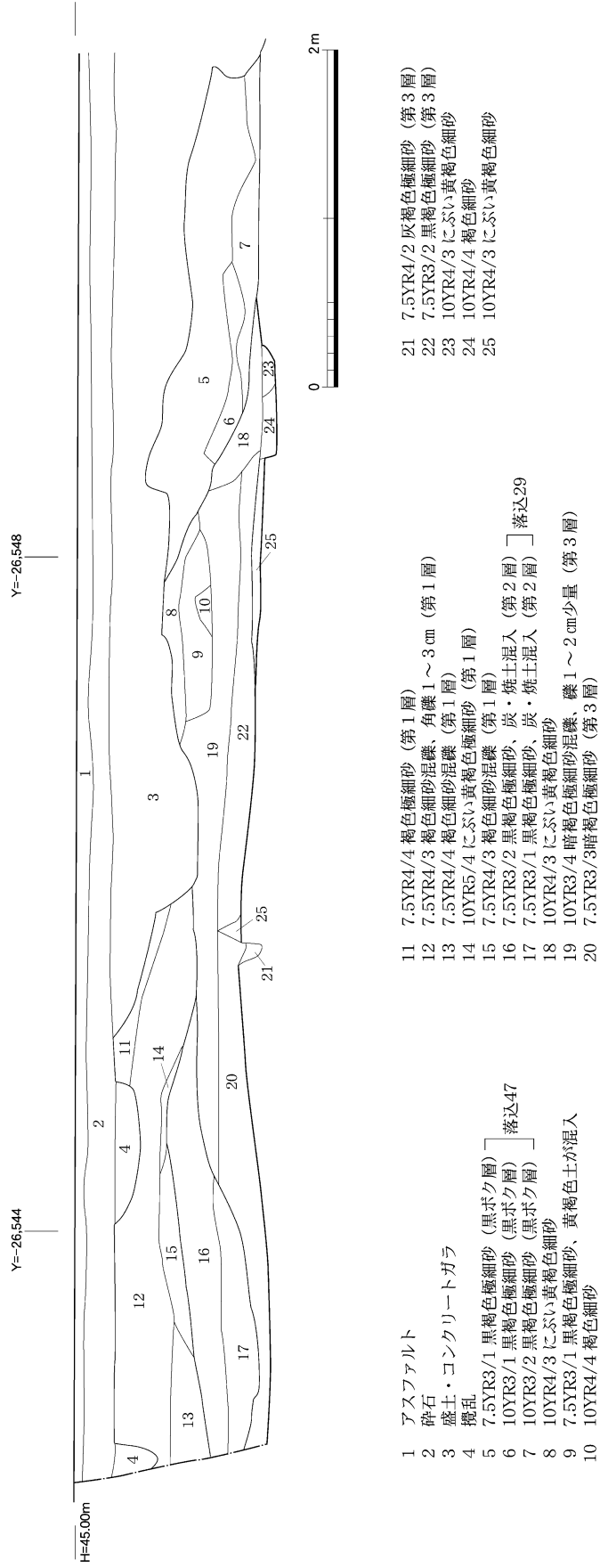


図5 南壁断面図 (1:40)

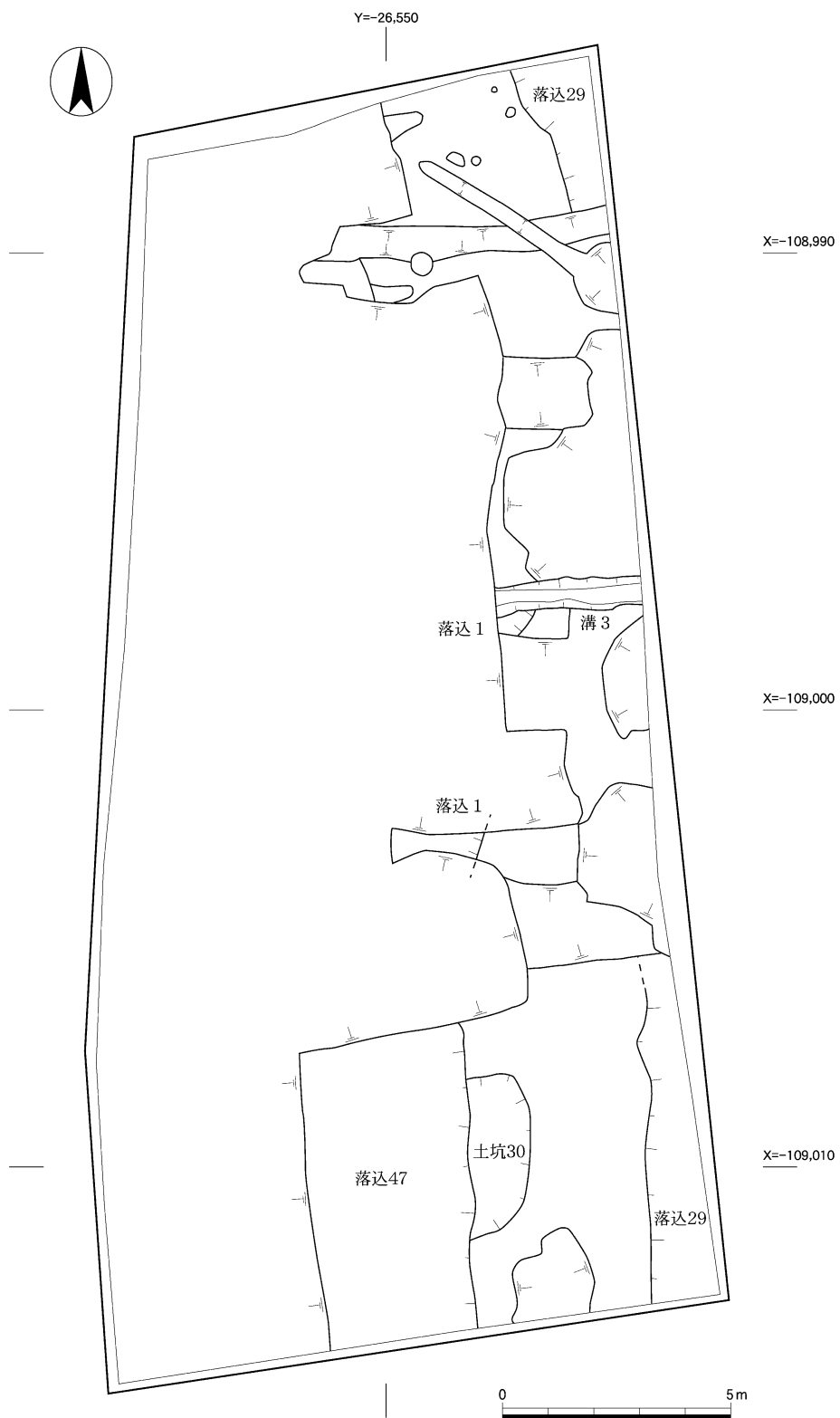


图6 第1面遺構平面図 (1 : 150)

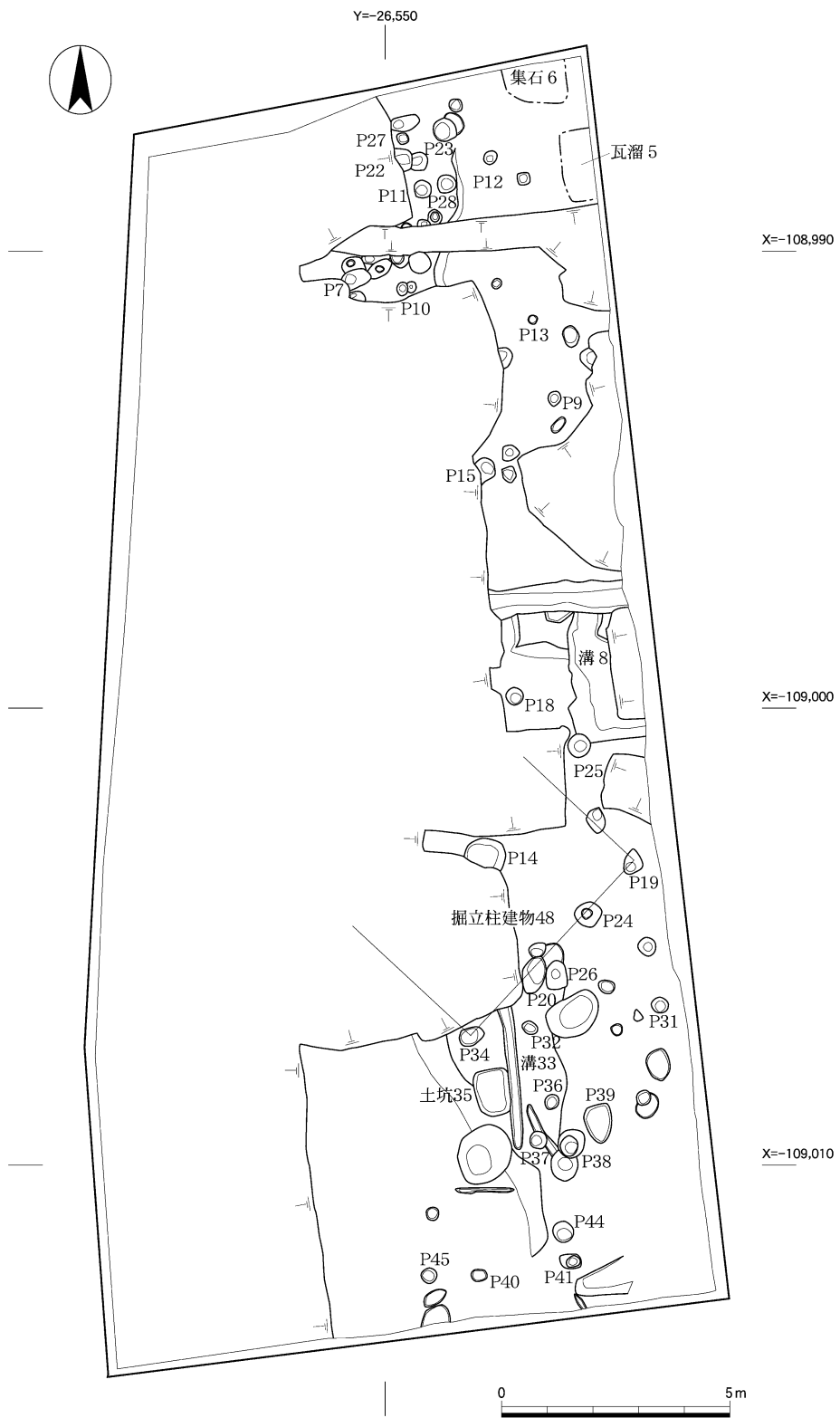


図7 第2面遺構平面図 (1 : 150)

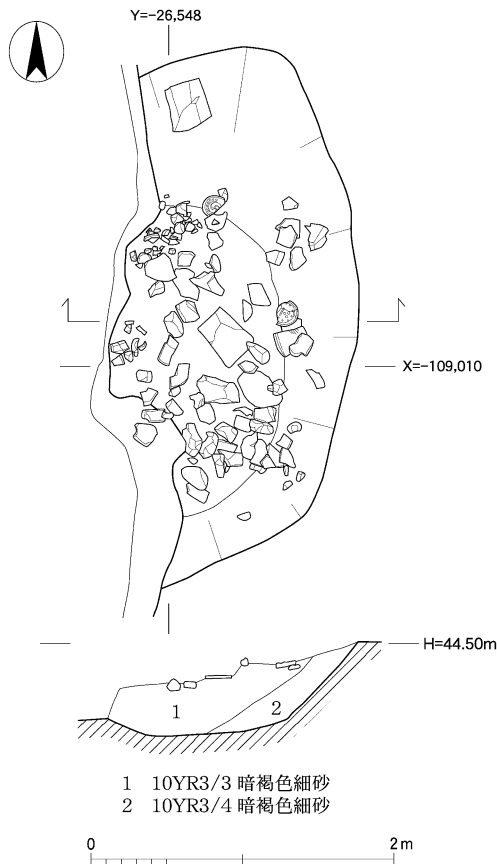


図8 土坑30実測図(1:50)

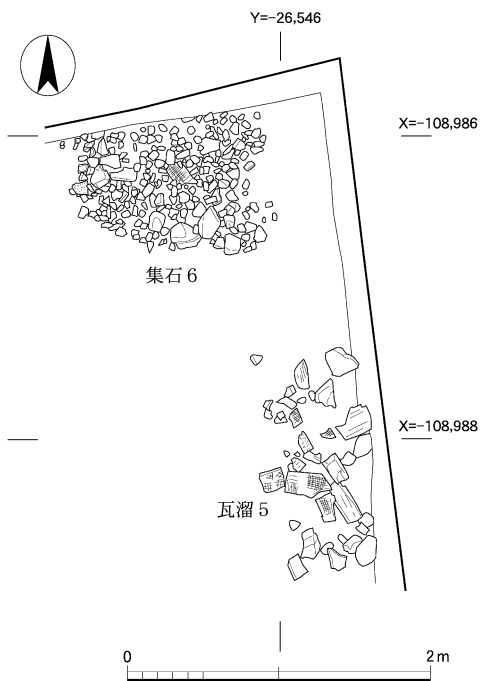


図9 瓦溜5・集石6平面図(1:50)

埋土から瓦・土器がまとまって出土した。

### (3) 第2面の遺構(図7、図版1・2)

第2層・第3層を除去し基盤層上面で検出した遺構である。瓦溜・集石・溝・ピットなどがある。

瓦溜5(図9、図版1) 調査区の北東部で検出し、南北1.5m、東西1.0mの範囲で瓦と石が集中して出土した。瓦については奈良時代と平安時代の瓦が大きい破片で出土している。

集石6(図9、図版1) 瓦溜5の北側で検出し、北側は調査区外へのびている。大きさは東西1.4m、南北1.0mで、径2~10cmほどの石と瓦を敷き詰めている。

溝8 中央部で検出した南北方向の溝状遺構である。東側を攪乱されているが、幅0.7m、深さ0.3mを測る。平安時代の瓦と土器が出土した。

掘立柱建物48 1区から2区にかけて検出した。西半部は攪乱を受けているが、2間×3間の掘立柱建物と考えられる。建物の軸線は北に対して東へ48°振れている。柱間は1.3~1.5mを測り、柱穴は0.4~0.5mの円形で深さ0.2m程度である。遺物は小片であるため時期は不明確であるが、奈良時代と考えられる。

ピット群 全域でピットを検出したが、大部分が攪乱されているため、建物としてまとまりがたい。時期は奈良時代から平安時代まで及ぶ。

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

鎌倉時代から室町時代の遺物は、土坑 30 からまとまって出土している。土師器皿には白色系と赤色系がみられ、焼締陶器甕、青磁椀・皿などがある。瓦類もまとまって出土している。

平安時代の遺物は、瓦溜 5、集石 6、第 2 層、第 3 層から出土している。土師器皿、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿・壺、白磁皿、丸瓦、平瓦がみられる。

奈良時代の遺物は、遺構に伴っていないが、包含層の第 3 層から出土している。土師器杯・高杯、須恵器杯、丸瓦、平瓦が出土している。平瓦は大きな格子目叩きをもち広隆寺境内から出土したもので、広隆寺と関係する遺物である。

### (2) 土器類

瓦溜 5 出土土器 (図 10) 1 は輸入陶磁器白磁皿である。底部は上げ底ぎみの平底、体部は直線的に外開きで口縁部はわずかに外反する。体部外面に篋押圧縦線を施し、内面中位に段を有する。底部のみ露胎で灰オリーブ色の釉薬を施す。2 は土師器壺で平底ぎみの底部に丸い体部、わずかに外傾する短い頸部に丸くおさめる口縁部である。外面に粘土紐の継ぎ目が明瞭にある。いずれも平安時代後期に属する。

土坑 30 出土土器 (図 11) 3～13 は赤色系の土師器皿で、大きさによって大小 2 種に分けられる。小の 3～10 は直径が 7.2～8.9 cm を測り、大の 11～13 は直径 11.3～12.3 cm である。7 はへそ皿状に底部をへこませ、4 もへこませた後上から押しつぶした痕跡がある。14～21 は白色系土師器皿で、小の 14・15 は直径 8.5～8.9 cm、大の 16～21 は直径 11.4～12.9 cm を測る。白色系土師器皿の大は赤色系土師器皿と異なり、底部が小さく体部へかけて丸みがあり器高が深い。22 はミニチュアの土師器

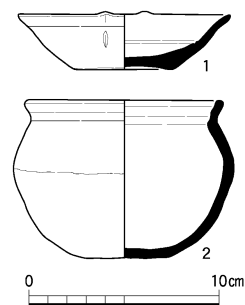


図 10 瓦溜 5 出土土器  
実測図 (1:4)

表 3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
奈良時代	土師器、須恵器、瓦		平瓦 9 点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、瓦		土師器 2 点、須恵器 4 点、瓦器 1 点、輸入白磁 1 点、軒丸瓦 3 点、軒平瓦 1 点、丸瓦 2 点、平瓦 1 点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、青磁、白磁、瓦		土師器 20 点、瓦器 2 点、軒丸瓦 3 点、軒平瓦 3 点、平瓦 6 点		
合計		25 箱	58 点 (5 箱)	0 箱	20 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より 5 箱多くなっている。

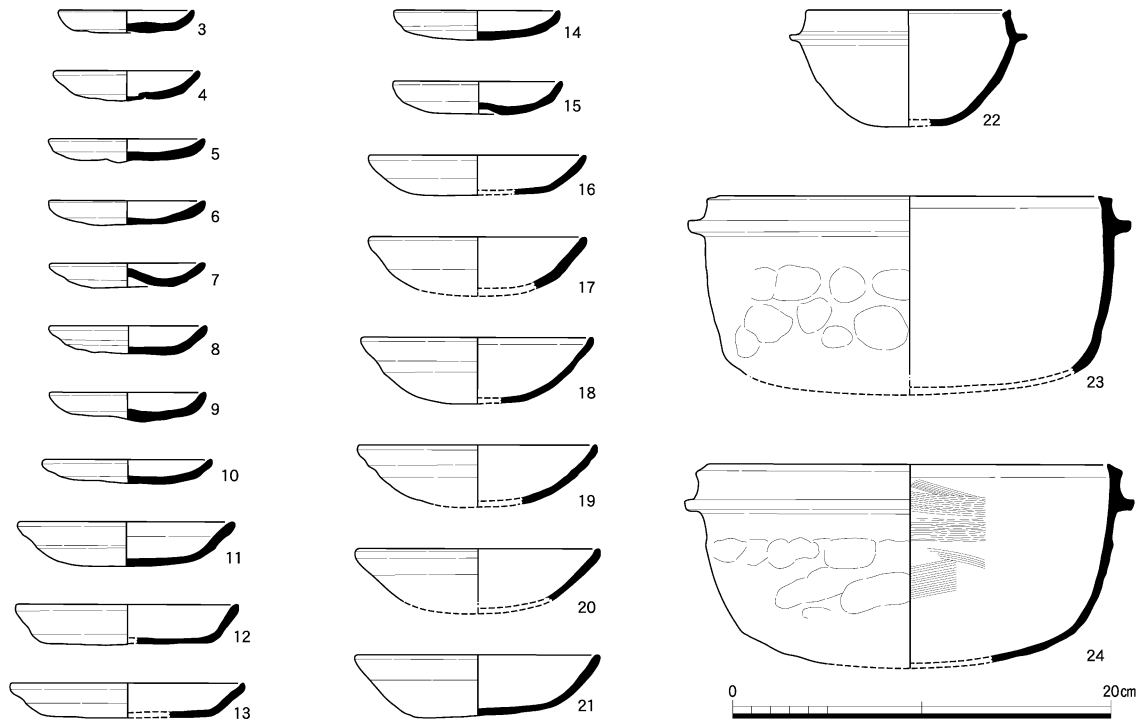


図 11 土坑 30 出土土器実測図 (1 : 4)

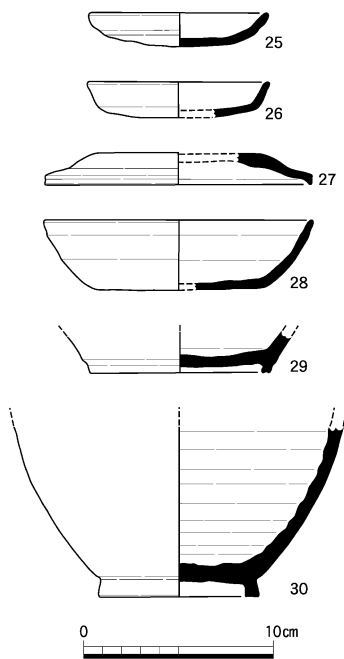


図 12 第 2 層・第 3 層出土土器実測図 (1 : 4)

釜で丸い体部に直立する口縁と体部に鏝をつける。通常の釜と異なって白色の胎土をもち、煤は付着せず二次焼成は認められない。23・24 は瓦質釜である。丸みのある底部から直立する体部に鏝を貼り付け、口縁端部は外傾する端面をもつ。23・24 とも底部から体部にかけて煤が付着する。24 は体部外面の調整は指オサエで内面はハケ目である。土坑 30 出土土器は京都Ⅶ期中段階（鎌倉時代後半）に属する。

第 2 層・第 3 層出土土器 (図 12) 25 ~ 27 は第 2 層から出土した。25 は土師器皿、26 は瓦器皿である。27 は須恵器蓋の小片でつまみの有無は不明である。27 は下層からの混入品である。28 ~ 30 は第 3 層から出土した。28・29 は須恵器の杯である。28 は平たい底部と外傾する体部をもち高台は付かない。29 は底部と高台部分のみで体部は欠損している。30 は須恵器の壺で体部上半は欠損している。卵形の体部で内面は水引きのために凹凸が激しく、外面は丁寧になる。第 2 層は平安時代後期、第 3 層は平安時代中期に属する。

### (3) 瓦類

軒丸瓦 (図 13、図版 3) 31・32 は複弁蓮華文軒丸瓦の同文異範で、外区に珠文帯と唐草文を配する。周縁をオサエとナデで丸く調整する。京都産である。33 は単弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当面



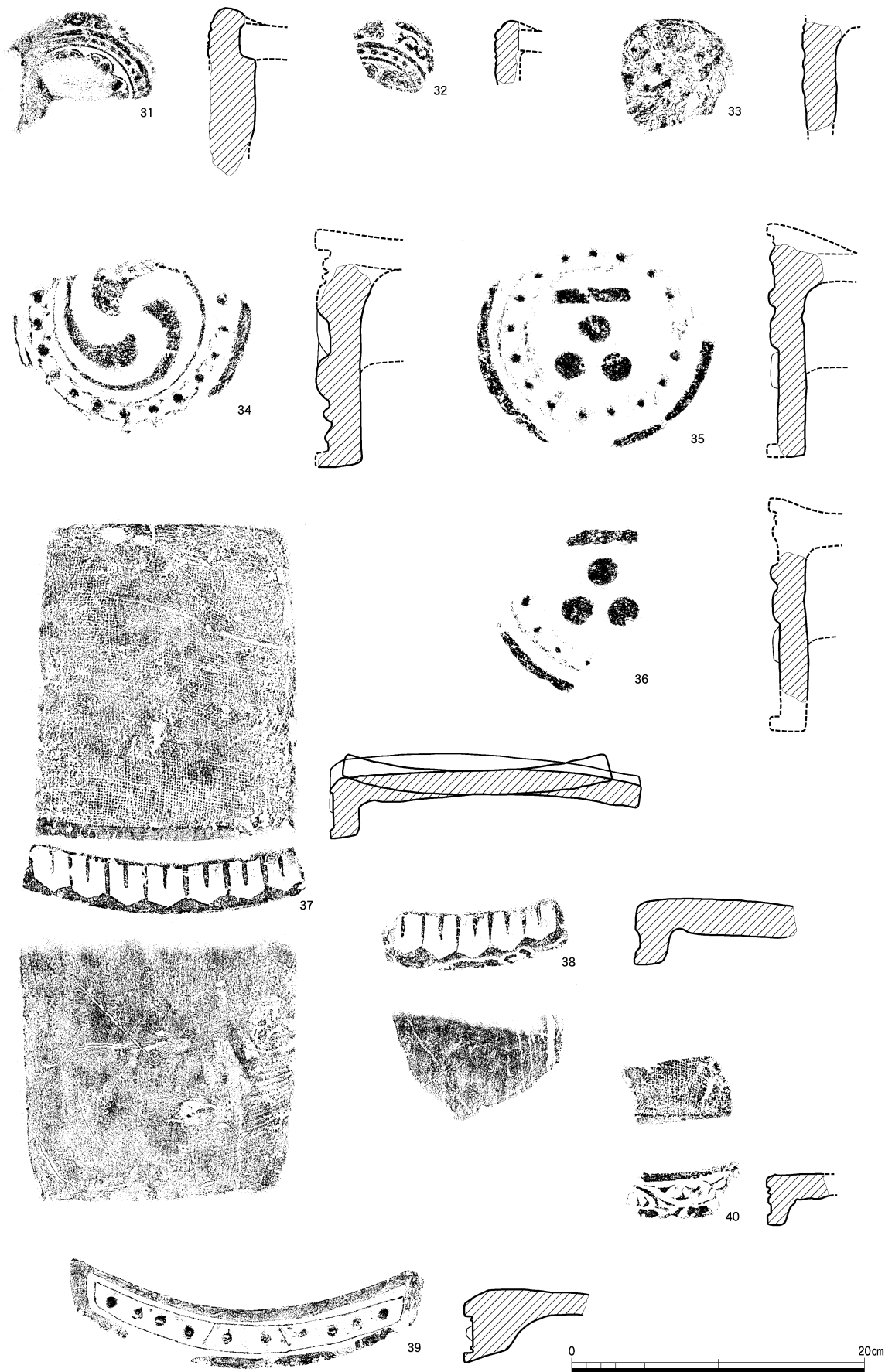


图 13 軒丸瓦、軒平瓦拓影·实测图 (1 : 4)

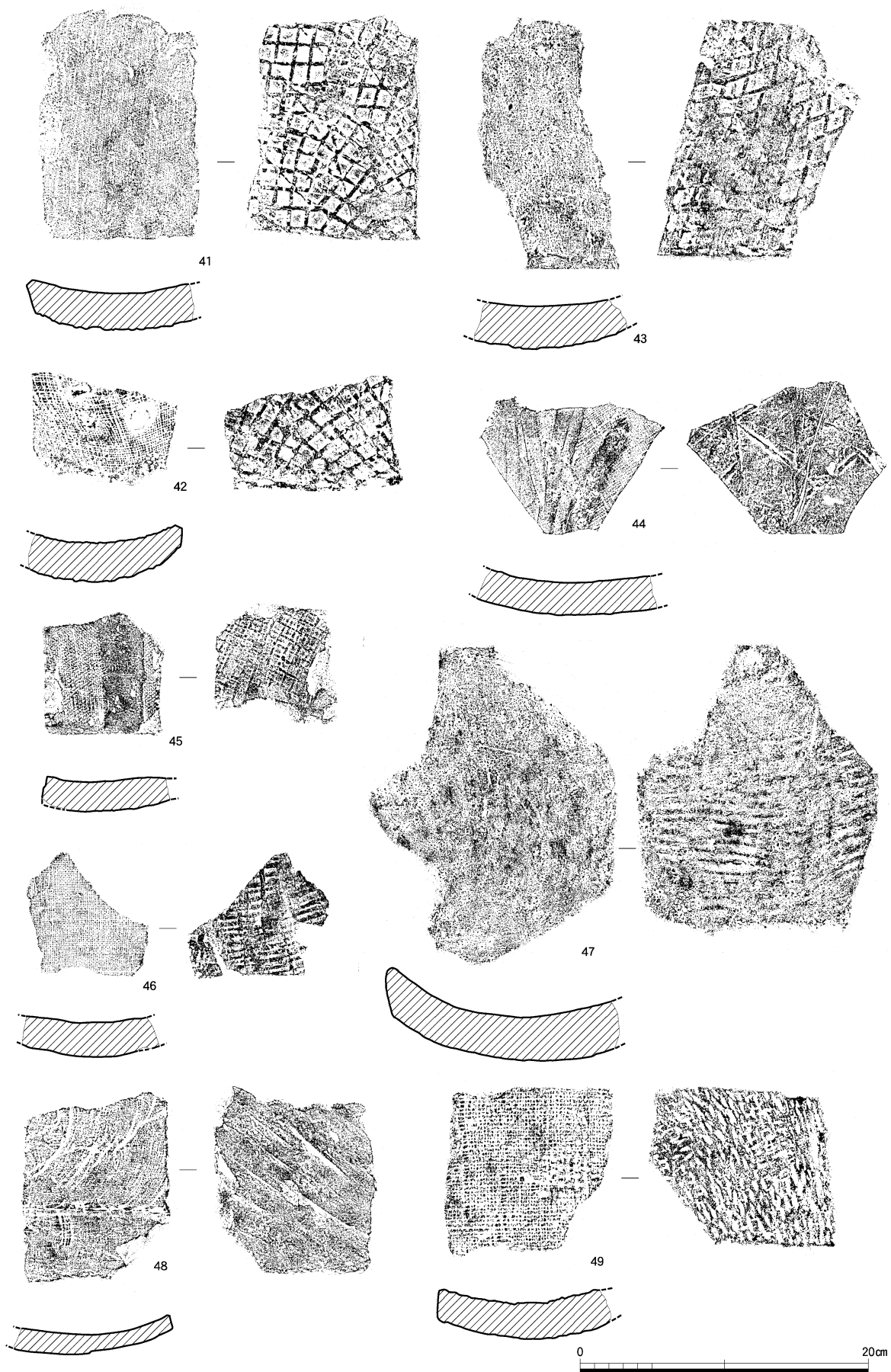


图 14 平瓦拓影·实测图 (1 : 4)

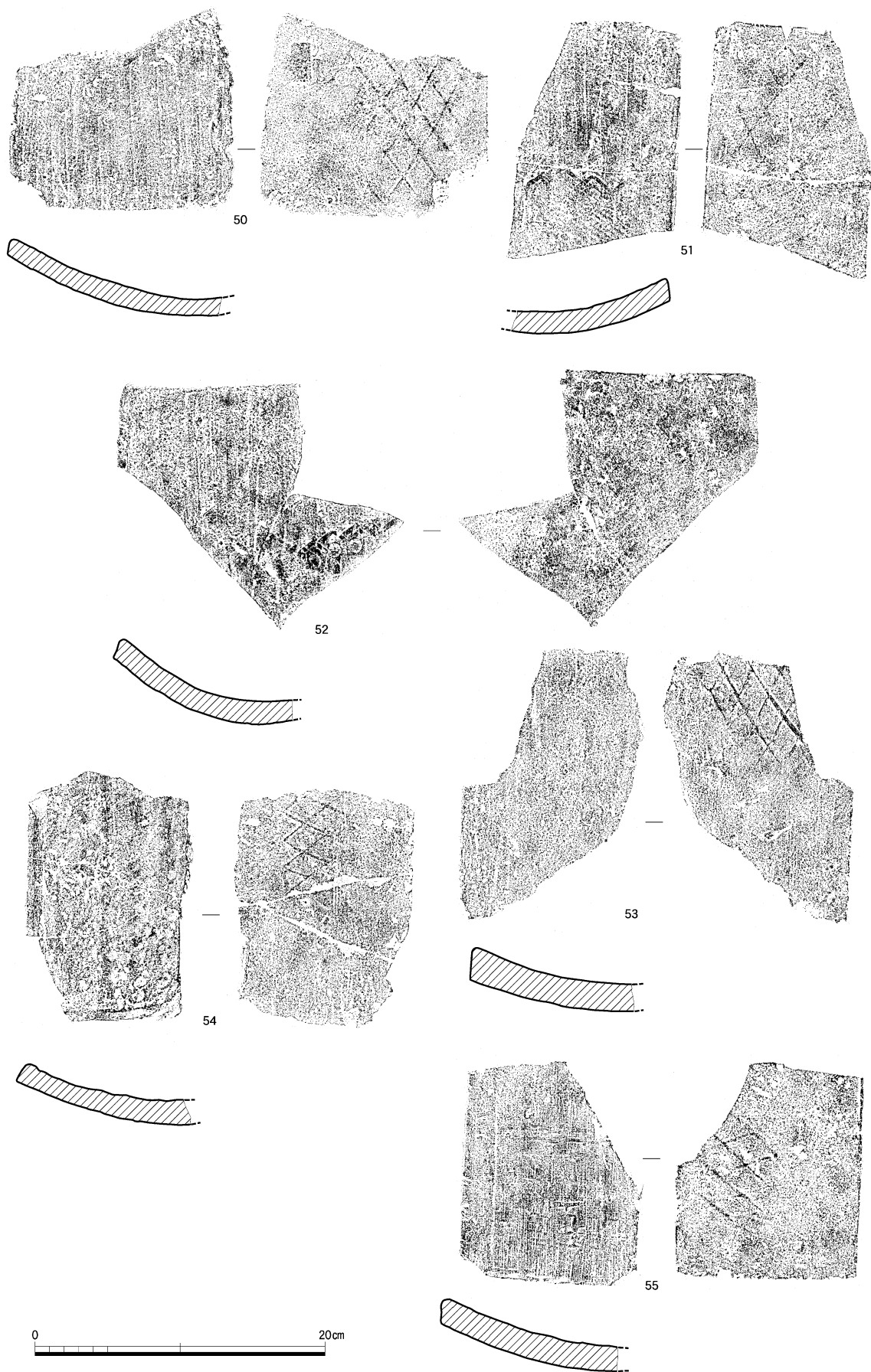


图 15 平瓦拓影·实测图 (1:4)

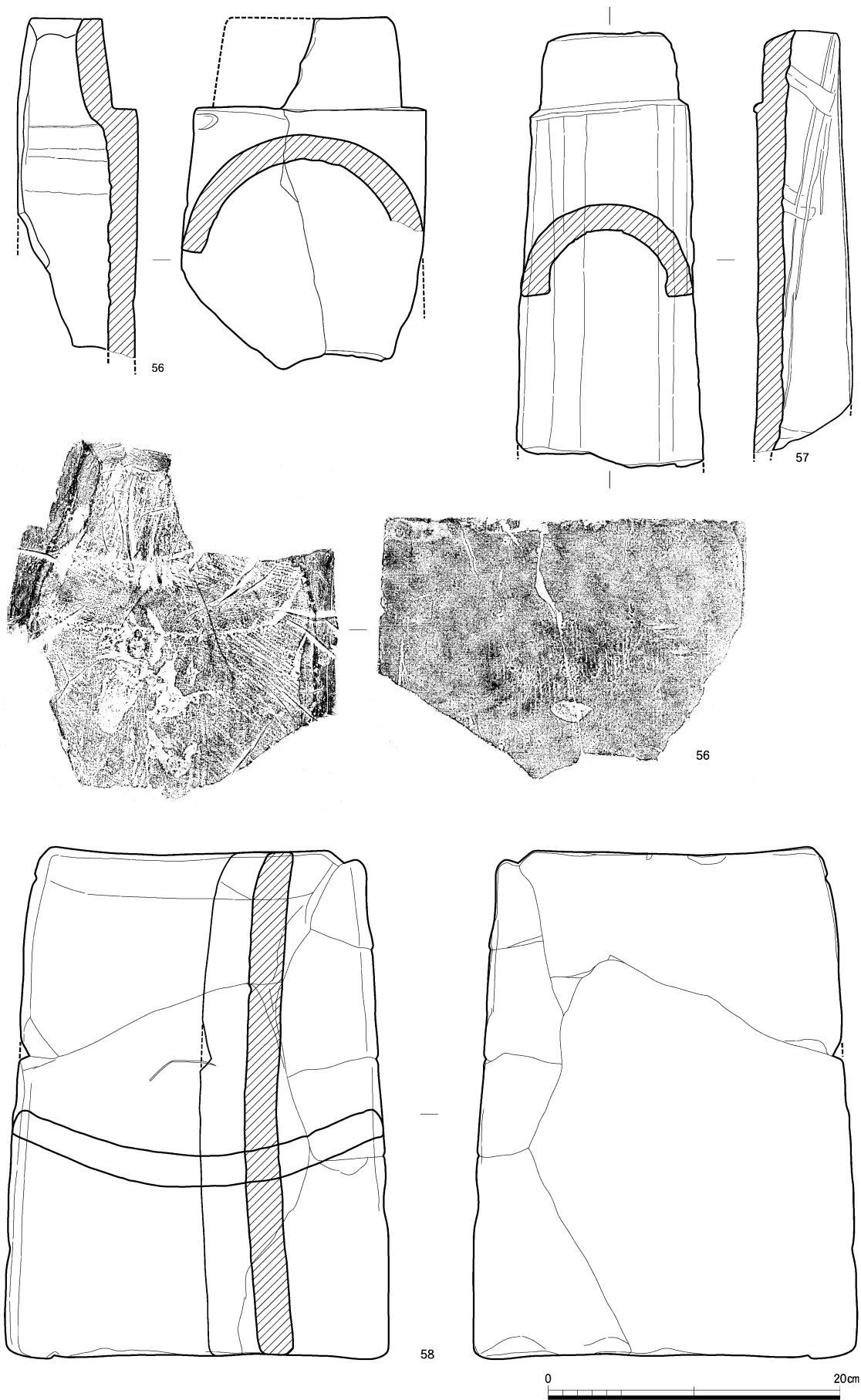


图16 丸瓦、平瓦拓影·实测图(1:4)

が荒れ文様は不鮮明である。34は左巻三巴文軒丸瓦で、外区に珠文帯と外側に細い圏線をめぐらす。瓦当裏面は丁寧なナデ調整である。35・36は同範品で、主文が一文字三ツ星文をあらわす家紋軒丸瓦である。外区に細い圏線と珠文帯をめぐらす。一文字三ツ星文は大江氏系氏族の代表家紋である。三巴文軒丸瓦(34)と家紋軒丸瓦(35・36)は外区の珠文帯と瓦当裏面の調整技法や胎土が近似し、同一産地の可能性がある。31～33は平安時代後期、34～36は鎌倉時代の瓦である。

軒平瓦(図13、図版3) 37と38は剣頭文軒平瓦で、瓦当折曲げ式の京都産である。38は剣頭文の鎬先端がとがり、37は丸くあらわす。37の剣頭文は7個を数える。37・38の平瓦凸面にはヘラ記号「ノ」が記されている。37は完形品である。40は折り曲げ式の唐草文軒平瓦である。39は和泉系の連珠文軒平瓦で、10個の珠文を配し、外区に界線をめぐらす。珠文の左から5個目と7個目、8個目と9個目の間に凸線を八の字状に施す。瓦当面には範傷が認められる。平瓦凹面には離れ砂を使用し、凸面は篋状器具で丁寧にナデ調整する。40は平安時代後期、37～39は鎌倉時代の瓦である。

丸瓦・平瓦(図14～16、図版3) 41～49は奈良時代の平瓦である。41～46は格子目叩きの平瓦で、41と42は長方形の格子、43は斜格子、44は格子の幅が大きい斜格子、45と46は単位が小さい長方形の格子叩きである。41と42は格子内に傷が確認でき、同じ叩き板を用いている可能性があるが、平瓦凹面の布目が異なる。47は平行叩き、48は無文叩き、49は縄叩きである。45と48は側面のケズリからみて桶巻き造りの可能性がある。また、48の凹面布目には綴じ紐の痕跡が認められる。41・47・49は側面のケズリ方向からみて一枚造りと考えられる。

50～55は中世に属する平瓦である。50・51、53～55には凸面に斜格子の叩き目が残る。格子目は細く幅広である。52と55は凹面にかすかな叩き痕跡がみえる。細い板状工具に記号を彫ったものである。

56～58は平安時代中期に属し、56・57は丸瓦である。56は凸面に縄叩き痕跡、57は小型で凸面を縦方向にヘラケズリする。58は平瓦で、凸面凹面ともに離れ砂を使用している。

## 5. ま と め

今調査は常盤仲之町遺跡と広隆寺旧境内遺跡に該当し、飛鳥・奈良時代の集落跡や広隆寺、また中世の遺構群が期待された。しかし、旧建物の基礎によって大きく削平されていたため、遺構は部分的に検出しただけであったが、壊されていないところでは平安時代から中世の包含層が良好に遺存していることが明らかとなった。調査地北側の JR 山陰線高架工事に伴う調査や NTT 敷地内の調査で検出された、鎌倉時代から室町時代の建物や池に関連する遺構は、今調査では検出されず、当該期の遺構は今調査地内まで及んでいないことが判明した。

調査区の北東部で検出した瓦溜 5 や集石 6 は、太秦と御室を結ぶ古道と想定されている城北街道に近接し、道路に面した施設の一部と推定できる。また、平安時代から中世段階で数度の整地が行われ、道路に面した開発がなされたものと想定される。

今調査では奈良時代にさかのぼる遺構は掘立柱建物 1 棟のみであるが、瓦などの遺物の出土は南方に位置する広隆寺の伽藍復元の参考となる成果である。今後、城北街道拡幅工事に伴う発掘調査を南へ進行することによって、これまで推定の域にある広隆寺の北限や東限を明確にすることが可能となろう。西方の東映太秦映画村内で見ついている飛鳥時代の集落については、今調査で明らかにできなかったが、攪乱が少なければ、当該期の竪穴住居の検出も十分に予想される土層の堆積状況であった。

家紋瓦は一般的に織豊期以降にみられる瓦である。今回の一文字三ツ星文軒丸瓦 (35・36) は土坑 30 より出土し、供伴した土器から鎌倉時代に属する。この一文字三ツ星文軒丸瓦は出現期の家紋瓦と思われ、貴重な資料といえる。一文字三ツ星文軒丸瓦は調査区北側の常盤仲之町遺跡の調査 (表 1 - 5) からも出土している。建物跡は未検出ではあるものの、当該地一帯から鎌倉時代の瓦が出土しているため、近隣に造営された御堂に用いられた瓦と思われる。一文字三ツ星文は毛利氏が有名であるが、大江氏の代表家紋でもある。大江氏は鎌倉幕府の政所初代別当である大江広元などの有力者を輩出している。常盤仲之町遺跡で検出される中世の遺構群は大江氏に関連すると類推される。

表4 掲載土器一覧表

番号	器種	器形	遺構	口径	高さ	底径	胎 土	焼成	色 調	残存	備 考
1	輸入白磁	皿	瓦溜5	11.2	3.0	5.8	緻密	良好	釉7.5Y6/2灰オリーブ色 内Y7/1灰白色	20%	
2	土師器	壺	瓦溜5	10.5	8.4	-	砂粒極少量	軟質	7.5YR7/3にぶい橙色	20%	
3	土師器	皿	土坑30	7.2	1.8	-	砂粒極少量	良好	7.5YR7/3にぶい橙色	20%	赤色系
4	土師器	皿	土坑30	7.8	1.6	-	赤色砂粒少量	やや軟質	7.5YR7/4にぶい橙色	90%	赤色系
5	土師器	皿	土坑30	8.2	1.3	-	微砂粒極少量	やや軟質	10YR7/4にぶい橙色	100%	赤色系
6	土師器	皿	土坑30	8.2	1.3	-	微砂粒極少量	やや軟質	7.5YR7/4にぶい橙色	40%	赤色系
7	土師器	皿	土坑30	8.2	1.3	-	微砂粒極少量	やや軟質	5YR7/6橙色	75%	赤色系
8	土師器	皿	土坑30	8.3	1.5	-	微砂粒極少量	やや軟質	10YR7/4にぶい橙色	75%	赤色系
9	土師器	皿	土坑30	8.3	1.5	-	砂粒少量	良好	7.5YR7/3にぶい橙色	90%	赤色系
10	土師器	皿	土坑30	8.9	1.4	-	砂粒少量	良好	10YR7/4にぶい黄橙色	50%	赤色系
11	土師器	皿	土坑30	11.3	2.4	-	砂粒極少量	やや軟質	5YR7/4にぶい橙色	50%	赤色系
12	土師器	皿	土坑30	11.7	2.1	-	砂粒(長石)	良好	7.5YR7/3にぶい橙色	25%	赤色系
13	土師器	皿	土坑30	12.3	(1.8)	-	砂粒(チャート)	やや軟質	7.5YR7/3にぶい橙色	20%	赤色系
14	土師器	皿	土坑30	8.5	1.6	-	砂粒(長石)	やや軟質	10YR8/2灰白色	60%	白色系
15	土師器	皿	土坑30	8.9	1.8	-	小石少量	やや軟質	10YR8/3浅黄橙色	100%	白色系
16	土師器	皿	土坑30	11.4	2.1	-	緻密	やや軟質	10YR6/1褐灰色	20%	白色系
17	土師器	皿	土坑30	11.5	(3.1)	-	砂粒極少量	良好	10YR8/2灰白色	25%	白色系
18	土師器	皿	土坑30	12.3	3.5	-	砂粒極少量	やや軟質	10YR8/2灰白色	30%	白色系
19	土師器	皿	土坑30	12.6	(3.2)	-	微砂粒極少量	やや軟質	7.5YR8/2灰白色	15%	白色系
20	土師器	皿	土坑30	12.9	(3.5)	-	砂粒極少量	良好	7.5YR7/2にぶい黄橙色	25%	白色系
21	土師器	皿	土坑30	13.0	3.2	-	砂粒少量	軟質	2.5Y8/1灰白色	100%	白色系
22	土師器	釜	土坑30	10.7	(6.2)	-	緻密	軟質	10YR8/3浅黄橙色	15%	白色系
23	瓦質	釜	土坑30	21.2	(10.5)	-	砂粒少量	やや軟質	外10YR5/2灰黄褐色 内7.5YR7/3にぶい黄橙色	50%	
24	瓦質	釜	土坑30	22.3	(10.9)	-	微砂粒極少量	やや軟質	外5Y3/1オリーブ黒色 内10YR7/2にぶい黄橙色	40%	
25	土師器	皿	第2層	9.5	2.3	-	微砂粒極少量	やや軟質	10YR7/3にぶい黄橙色	50%	
26	瓦器	皿	第2層	9.6	(2.0)	-	緻密	やや軟質	外10Y4/1灰白色 内5Y7/1灰白色	30%	
27	須恵器	蓋	第2層	14.1	-	-	微砂粒極少量	良好	5Y7/1灰白色	10%	
28	須恵器	杯	第3層	14.1	3.8	-	緻密	やや軟質	5Y7/1灰白色	40%	
29	須恵器	杯	第3層	-	-	9.5	緻密	やや軟質	5Y7/1灰白色	35%	
30	須恵器	壺	第3層	-	-	8.5	微砂粒極少量	良好	N6/0灰色	50%	

表5 掲載瓦一覧表

番号	種類	遺構	胎土	焼成	色調	備考
31	複弁蓮華文軒丸瓦	第2層	微砂粒（チャート）	やや軟質	10YR7/3にぶい黄橙色	
32	複弁蓮華文軒丸瓦	第2層	砂粒少量	やや軟質	10YR7/2にぶい黄橙色	
33	単弁蓮華文軒丸瓦	土坑30	小石少量	軟質	10YR7/4にぶい黄橙色	
34	三巴文軒丸瓦	土坑30	砂粒少量	やや軟質	10YR6/3にぶい黄橙色	
35	家紋軒丸瓦	土坑30	砂粒少量	軟質	外N/0灰色 内7.5YR7/2灰白色	一文字三ツ星文
36	家紋軒丸瓦	土坑30	砂粒少量	軟質	外N/0灰色 内7.5YR7/1灰白色	一文字三ツ星文
37	剣頭文軒平瓦	土坑30	小石（長石）多量	良好	10YR6/1灰色	
38	剣頭文軒平瓦	土坑30	砂粒（長石）	良好	2.5Y6/1黄灰色	
39	連珠文軒平瓦	土坑30	小石多量	良好	2.5Y6/3にぶい黄色	和泉産
40	唐草文軒平瓦	第1層	砂粒少量	良好	7.5Y6/1灰色	
41	平瓦	瓦溜5	微砂粒（長石）	良好	N4/0灰色	格子叩き
42	平瓦	第2層	砂粒（長石）多量	良好	2.5Y4/1黄灰色	格子叩き
43	平瓦	集石6	微砂粒少量	やや軟質	10YR6/3にぶい黄橙色	格子叩き
44	平瓦	溝8	微砂粒少量	良好	2.5Y6/1黄灰色	格子叩き
45	平瓦	第3層	微砂粒（長石）少量	良好	10YR6/2灰黄褐色	格子叩き、桶巻き造り
46	平瓦	第2層	砂粒（長石）多量	良好	2.5Y5/2暗灰黄色	格子叩き
47	平瓦	溝8	砂粒（長石）多量	軟質	10YR7/3にぶい黄橙色	平行叩き
48	平瓦	溝8	砂粒少量	良好	外N/0灰色 内2.5Y7/2灰黄色	無文叩き
49	平瓦	集石6	砂粒（長石）多量	やや軟質	10YR7/3にぶい黄橙色	縄叩き
50	平瓦	土坑30	砂粒少量	やや軟質	外2.5Y5/1黄灰色 内2.5Y8/2灰白色	格子叩き
51	平瓦	土坑30	微砂粒極少量	良好	5Y6/1灰色	格子叩き
52	平瓦	土坑30	砂粒極少量	良好	2.5Y5/1黄灰色	
53	平瓦	土坑30	砂粒少量	やや軟質	外2.5Y6/1黄灰色 内2.5Y7/3浅黄色	格子叩き
54	平瓦	土坑30	砂粒（長石）少量	良好	外N/0灰色 内2.5Y7/3浅黄色	格子叩き
55	平瓦	土坑30	砂粒（長石・黒色粒）少量	良好	2.5Y5/1黄灰色	格子叩き
56	丸瓦	第3層	砂粒小石少量	やや軟質	2.5Y7/2灰黄色	
57	丸瓦	瓦溜5	砂粒少量	良好	2.5Y5/1黄灰色	
58	平瓦	土坑30	小石	やや軟質	外N4/0灰白色 内7.5Y7/1灰白色	



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき							
書名	常盤仲之町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-21							
編著者名	前田義明							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 うずまさひがしほちおかちょう 太秦東蜂岡町	26100	908	35度 01分 02秒	135度 42分 33秒	2009年1月 20日～2009 年3月19日	335m <sup>2</sup>	道路拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
常盤仲之町遺跡	集落跡 ・墓跡	古墳時代後期 ～室町時代	掘立柱建物、土坑、 溝、落込	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦		平安時代から室町 時代にかけての整 地層を検出。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-21

## 常盤仲之町遺跡

発行日 2009年3月31日

編集  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961